世界の調和者

yuuyas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の調和者

【Ｎコード】

Ｎ６４９９Ｙ

【作者名】

ｙｕｕｙａｓ

【あらすじ】

ある日、神宮正和（じんぐうまさかず）は少女を助けて死んでしまった。だが目を覚ますとそこには純白の世界、さらに目の前で絶世の美女が頭を下げていた？その人は自分のことを神と名乗って・・・「彼方を私の神（しん）認者（にんしゃ）になってもらって、私の担当している世界に生まれ変わっていただきその世界の調和者（ちょうわしゃ）になって下さい！」え？なんで！？

よくある異世界転生ものです。魔法や魔物がいたりのファンタジーもので、主人公最強、ハーレムあり＜主人公朴念仁＞、人が死んだりします。この様なものが苦手なお方はご注意ください。

この作品は初の小説なので、誤字、脱字があると思いますが温かく見ててください。よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。以後よろしくお願いします。

プロローグ

「明日から夏休みだ～」

俺、神宮正和(じんぐうまさかず)は叫んでいた。

なぜ叫んだかって？だってね，去年の夏休みはさんざんだったんだ。

去年のこの日、なんか久しぶりに公園行きたいな～なんて思って行ったら

いきなり、男の子が出てきて道路に飛び出しって行ったんだよ。

そしたら、曲がり角からトラックが出てきて男の子が轢かれそうになったんだ。

俺はとっさに飛び出して、男の子を抱え込んだ。

「痛っ」

奇跡的にどちらとも無傷と言うわけにはいかなかったようだ・・・

俺は激痛がする右腕の方を見ると中の肉が見えてた・・・・

その後、男の子のお母さんが来て、物凄く感謝してくれて救急車まで呼んでくれた。

診察を請けたら、腕の皮がむけて肉が見えてただけだった。

折れてるかと思った・・・・

で、このせいで俺は3週間右腕が使い物にならなくなり、
治ったと思ったら残りの1週間宿題に追われ
夏休みのさよならだ！
今年こそは遊びまくってやる！そんな事を思っていると
去年事故にあった公園に来ていた・・・

嫌な予感がする。
俺はこの場所からいち早く逃げるために、全力で逃げた。
へたれだって、しょうがないだろ
また遭ったら夏休み消えてしまうじゃないか。

しばらく走って、さっき通った交差点にいた。

「はぁはぁ」

５００ｍぐらい思いっきり走った。疲れたぜ・・・
俺は顔を上げると横断歩道に5，6歳の女の子が転んでいた。

信号が点灯し始めた、すごく痛かったのだろう。
危ないから女の子を助けようと

「プップ～」

赤信号なのにワゴン車が曲がり始めた。後ろにはパトカーがいる。
盗難車だろう。ん？あの子めっちゃ危なくない？

（助けなきゃ！）
俺は全力で走り、少女を抱えた。
また夏休みが消えたな。また来年夏休み。

「バ～ン！」

音と一緒に俺の体に激痛が放ち、それと共に意識が消えていった・・・

そして、一人の少年が少女助けて命を落とした。

プロローグ（後書き）

読んで下さった方ありがとうございます。
この話で主人公がどんな人か分かったと思います。危険なのを分かっていても人を助けてしまう。主人公体質、これ以外にも人助けしているのですがそれは、ストックが切れたときに書かせていただきたいと思っています
次回は神との対面で、ここで色々能力をもらいます。
次話も読んでもらえたら嬉しいです。

神の世界（前書き）

２回目の投稿です。この作品で結構重要な神の登場です。名はヘルシスです。どうぞ、お楽しみください。

神の世界

「う～」

真っ暗な世界だ。
体が重い、なんでだ？
何かあったけ？

あれ？確か女の子を助けて、そのまま・・・
死んだ？
でも、なんで体に感覚あるんだ？
力を入れると動けそうだな。

俺は回りを確認するため目を開いた。

「なんだ～？」

俺は驚いた。目の前には純白の世界で広がっていた。
それと、「何であなた頭下げてるの？」

なんかわかんないけど目の前に金髪の女性が頭を下げていたのだ。

「すいませんでした！」

頭を下げながら腰を何度も折っては伸ばしを繰り返してた。
辛くないのだろうか？
あ、そうじゃなかった。

「頭上げてください。」
「はい・・・」

やっと顔を上げってくれた。
それにしてもきれい過ぎるだろう。
目の前の女性は絶世の美女と言ってもおかしくは無いだろう。
それくらいの美貌《びぼう》だった。
でも、凄いまぶたがうるうるしてる。
にしても綺麗だな～

「どうしたのですか？ぼっとして？」

あ、やば見とれてた。

「い、いえちょっと考えごとしてて・・・それにしてもここ何所ですか？
あと何で謝っていたんですか？」
「ここですか？ここは神の世界という場所ですね。
謝っていた理由は・・・私のミスで彼方を死なせてしまって・・・」
「え？ミスですか・・・」
「はい・・・少し時空を歪めてしまい、
彼方の生きる時間を減らしてしまって・・・本当にすいませんでした。」

またもや頭を下げられてしまった。あの～何でまた涙目になるんですか！

「いいですよ。ミスぐらい誰にもありますから。
それより次進みません？ほら～あの、神の世界？だっけその事で。」

「ありがとうございます。優しいですね。ではお言葉に甘えてここの説明をします。
神の世界言葉通りで、神々が住む世界です」

切り替え速え～神々が住む世界？じゃあこの人は・・・

「じゃあ、あなたは神様？」
「はい！私は神です。神宮正和さん」
「何で俺の名前を？」
「当たり前ですよ。神なんですから名前ぐらいは誰でも言えます」
「あ、そっか。神様の名前も教えてください。」
「私ですか？私はヘルシスです」
「ヘルシス、あ！すいませんヘルシス様」

やばい呼び捨ててしまった。

「いいですよ、ヘルシスで。というか、敬語もやめてもらえたら嬉しいです。」
「わかりました。じゃあ、ヘルシスさんで」
「はい！」

良かった優しい神様で。

そういえば何でここにいるんだ？
だってここ神の世界だよね？

「ヘルシスさん。俺はなんでここにいるの？」
「あ、話してませんでしたね」

彼女は大きく息を吸ってから・・・

「彼方に私の神認者(しんにんしゃ)になってもらって、
私の担当している世界に生まれ変わっていただき
その世界の調和者(ちょうわしゃ)になって下さい」

え？なんで！？

「何でですか！？こんな何にも取り得の無い俺なんか。っていうか
神認者や調和者ってなんですか？」
「あ、あんまり一気に言わないでくださいよ～」
なんか、涙目になってるし。これって俺悪い？
つ～か神としての威厳なさ過ぎだろう。

なんか、静かになってしまった。居ずらい・・・
しょうがない俺から言わないと・・・

「すいません。一気に言いすぎました。じゃあ、一つ一つお願いします」

俺って結構甘いかも。

どうやら落ち着いた様で口を開いた。

「ありがとうございます。まずは神認者ですね・・・・・・・」

俺は彼女の長〜いお話を聞いていた。
聞いた話だと神認者（しんにんしゃ）と言うのは、
俺みたいに前の世界で死んだ奴がある一定の条件が揃（そろ）えば、
神が認め―この世界（神の世界）に呼ばれて、生まれ変わり
神が干渉できない世界の乱れなどを直すものらしい。
このとき、前の世界の記憶は残っていなく、
神との対面時からの記憶しか残っていないみたいだ。
さらに、この神認者ってのにえらばれた奴は
そいつを認めた神の、１０００分の１の力と
神の武器（神器）をもつ事が出来るようだ。

世界の調和者（せかいのちょうわしゃ）（以後調和者と訳す）は、
その世界で一人で世界の一番高位神がその者気に入り、
ここに呼び出してその人（神の世界）に自分の担当している世界の調和者になってもらって、

その世界に戻り暴走した神認者(しんにんしゃ)や魔物の数を倒したりして調和するようだ。
そして、その人は神認者と一緒で神の力を受け取る事が出来る。
だが、力の桁が違う調和者はその神の１０分の１の力を受け取れるみたいだ。
だが、神器はもらえないし普段は力事態に封印が掛かっていて、
それを解除しなければその力は使えなく、他の神認者から比べてかなり弱いようだ。
たとえ、解除しても力に耐え切れず自爆するか、
その力を操っても体に負担が掛かり大怪我を負ったり、
あまりの力に世界が拒絶して周囲の環境がかなり悪くなったりするようだ。
使い勝手悪いな。

俺のように調和者と神認者の二つの力をもっている事は前代未聞のようで、神認者はヘルシスさんが自分の世界に干渉したいからしたようだ。調和者は前の世界(地球)の記憶をある程度もっていないと出来ないようなので（何故だかは教えてくれなかった）俺には前の世界の記憶は残るようだ。

なんで俺が選ばれたかはヘルシスさんに気に入られた事と、
事故に遭いそうになった人たちを助けたりした事で、
自分で言うのもなんだがその～、心が優しいっていうのが重要みたいだ／／／
恥ずかしいな。

「誰に話しているんですか？」

えっ？なんで声に出していないはず。

「考えただけで思考は読めますよ。神ですから！」

「すごいっすね」

これしか言えない、今から考える事をやめよう。

読まれる。恐い

「でっ、話によると力と神器（しんき）ってのをくれるみたいだけど・・・」

「あんまり、驚かないんですね？まあ、話が早くていいんですけどね」

「じゃあ、お願い」

「はい。まず、力を初めに」

あ～眩しいなんて素晴らしい笑顔なのだろう。

バカな事を考えていると、

「では、いきますよ～」

そんな事を言うと、ヘルシスさんはこっちによって来て

「ん～～～～」

え？唇にやわらかい感触が

キ、キ、キスしてる～

「ぱっあ～契約完了です。」
「なんで、キスなんですか～」

俺はいきなりされた驚きとこんなきれいな人(神)がキスしてくれた事の嬉しさや恥ずかしさで混乱しながら言った。

「あ、人はキスを愛情表現でやるんですね、忘れてました。
今のは、契約のキスで神が神認者(しんにんしゃ)にすることです。
どうですか？力が沸いてきたはずです。」

確かに力が沸いてきた。さっきはキスで気づかなかったけどこれは凄いな。
契約が親父だと最悪だな。ヘルシスさんで良かった。

俺は一人で安心していると苦笑いしているヘルシスさんに手招きされた。

「あの～いいですか？」
「すいません」
「いいんですよ」

なんて最高の笑顔だ癒される～

「次は、神器ですね。正和さんの神器は～「正和でいいよ。」え～

はい正和／／／」

顔を赤くしてる。なんでだ？まぁいいか。

「えっと～正和の神器はこれです。

ヘルシスさんは右手に力を込めると白い粒子が集まってきて、
一つに固まった。
その手には白色の刀が握られていた。

「これは？」
「これは、白の武器（ホワイトウェポン）です。
見た目のまんまですけどね。両手出してください。」

言われた通りに両手を出すと、
ヘルシスさんが白銀の武器を粒子にして俺の手に重ねた。
彼女と俺の手の間が強く白く光った。

彼女は手を離すと「出来上がりです。」
と言ってきた。俺の体は何にも変化がない。

「何か武器をイメージしてください。何でもいいですよ。
基本的に真空の場所じゃなければ出せますよ。
一種の創造能力を武器限定にして空間に出しているだけですから」

俺は言われた通りに一本の短剣を想像してみると、
右手から何もかもが白い短剣が有った。

「すごい！」
「はい！消す方法は無くなれって念じれば消えます。
切れ味や精度は武器を想像した時のイメージが大切になります。
例えば何でも切れろって思えば何でも切れる武器の出来上がりです。
武器の数などは想像の時に思ってください」
「わかりました」

俺は消えろと念じた。すると短剣が粒子に戻り、
右手に吸い込まれていった。

「なんてチート」
「はい、これは物理系最強武器ですから。他の神認者の方も持っていますけどね。
これはほどでは無いですけどね。
あっ、でも物理以外でも空間、時空、特殊など色々ありますけど」
色々あるな。

俺はしばらくヘルシスさんと話した。
世界の名は「イニュート」と言い。詳しい事は転生した時に、勉強してくださいとのことだ。
神認者や調和者の力も転生した後で自分で見つけてくれと。
「なんで？」って聞くと、
「転生する前に教えてしまうとそれを意識してしまって、
この世界で暴走してしまうので言えません。」

こう彼女が言っているのだからしょうがないとしよう。
転生後は記憶は残り、何かが遭ったら俺の夢の中で話しが出来るって言っていた。
ビックリ！

「そろそろ、行くときですね。こっちに来てください。」

言われた通りにヘルシスさんの所に行く。

「ありがとうございました。ヘルシスさん」
「いえいえ、これからお願いしますね。正和」

にっこりと微笑んでいた。幸せだ～

「では転生を開始します。空間転生術（くうかんてんせいじゅつ）！」

彼女がそう言うと俺の意識が無くなり、
再び真っ黒な空間に入って行った。

神の世界（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。今回は正和が死んだ後に来た神の世界のお話です。結構重要な話でした。神認者や、調和者（世界の調和者）の説明難しかったです。改めて文才の無さを自覚しました・・・・

次話は新章です。今までのはプロローグだったので、今までよりも頑張って投稿していこうと思います。次回もよろしくお願いします。

設定？（前書き）

設定です。今までの登場人物やその人達のステータスや使用魔法、登場魔物を書いていきます。あらわし方はＥ～Ａ→Ｓ→ＳＳ→ＳＳＳ→Ｘ→Ｒ左から段々能力が上がっています。成人男性の平均がＤとします。

この作品は、ギルドのランクや魔物、人、その他種族の強さでもこのあらわし方でいきます。無い場合は－で表します。

では、設定？です。どうぞ！

設定？

主要人物、その他種族
名　神宮（じんぐうまさかず）　正和（男）

種族　人族　歳　１４歳

体重　５６ｋｇ　身長１６７ｃｍ

容姿　上の中
髪は黒の長さは首の中間くらい
目の色は黒

性格　誰かが困っていたら後先考えずに助けに行ってしまう。
女性の恋心には全く気づかない。
負けず嫌い、やさしい、努力家、朴念仁

ステータス　知力Ｓ　力Ａ　走力Ｓ　体力Ａ　精神Ｂ
集中Ａ　回復Ｃ　運Ｃ
←（ヘルシスから力をもらった後）
知力Ｓ　力ＳＳＳ　走力ＳＳＳ　体力ＳＳＳ　精神Ｂ　集中Ａ　回復ＳＳＳ　運Ｃ
（魔法ステータス）
魔力量ー　、精製度ー　、操作力ー、戦闘力Ｃ（魔法が使えないので）

属性　火ー、水ー、風ー、土ー、雷ー、闇ー、光ー、無ー、氷ー、時ー、重力ー、空間ー、

特殊能力
白の武器（ホワイトウェポン）、？～～～、？～～～、？～～～、？～～～、？～～～、

？〜〜〜

武器　白の武器（ホワイトウェポン）

キャラ説明

誰でも助けてしまう優しい人。１４歳の夏休み前に少女を助け死んでしまったが、神・ヘルシスのミスで死んでしまったと言う事で彼女の神認者（しんにんしゃ）と世界の調和者（ちょうわしゃ）になり新たな世界に生まれ変わる事になった。もともと運動神経や頭も悪くないため、ヘルシスから力をもらった時に普通の人としてはありえないスペックになってしまった。

名　ヘルシス　（女）

種族　神族　歳　？歳

体重　？ｋｇ　身長１７２ｃｍ

顔　上の上
髪は金で長さが腰までである
目の色は金

性格　何事も完璧にやる。恥ずかしがりや。
完ぺき主義、恥ずかしがりや

ステータス　知力Ｒ　力Ｒ　走力Ｄ　体力ＳＳＳ　精神Ｒ
集中Ｒ　回復Ｒ　運Ｒ

魔力量R　、精製度R　、操作力R、戦闘力R

属性　火R、水R、風R、土R、雷R、闇R、光R、無R、氷R、時R、重力R、空間R、

特殊能力
白の武器（ホワイトウェポン）、神気、透し、思考解読、瞬間転移、夢介入、空間制御、時間制御、

武器　白の武器（ホワイトウェポン）

キャラ説明
正和の命を時空を歪めて短くしてしまうと言うミスをしてしまった、かなり天然な神様。だが、神の中ではトップクラスの力を秘めており、一つの世界（イニュート）の担当神である。ちょうど空いていた世界（せかい）の調和者（ちょうわしゃ）の座を正和に任せ更には世界に干渉するために自分の神認者（しんにんしゃ）の座までも与えてしまった。

モブキャラ
男の子（男）
特にないので無し

女の子（女）
特にないので無し

女のこのお母さん（女）
特にないので無し

登場魔法
・空間転生術

登場魔物
（登場しません）

設定？（後書き）

設定？でした。設定は章の終わりや、長ければ区切りのいい所でやっていきます。武器は５～１０個ぐらい溜まったら「武器設定」、道具は（以後アイテム）は３０個ほど溜まればやろうと思います。次はいよいよ新章突入！です。

（編集して登場魔法だけ載せて詳しい設定は別に載せます）

誕生（前書き）

ｙｕｕｙａｓです。この章は正和の転生先「イニュート」も世界観や正和の力について書こうと思います。さて、今回の話は短く正和がイニュートに産まれてくる話です。お楽しみください。

誕生

暗いな。
俺は確か・・・ヘルシス(神)さんに神の世界だっけか？で会って・・・
神認者(しんにんしゃ)や調和者(世界の調和者)について話されて。

転生して、その世界の調和者になるんだっけか？
あれ？つ～かここ何所だ？

俺はいきなりの状況に困惑していると
行き成り激しい光が体全体を包んだ。
眩しい！俺は声を出そうとすると

「おぎゃ～おぎゃ～」

ん？おぎゃ～おぎゃ～？
な、なんだ！声がおぎゃ～だと！
よ、よし、れ、冷静になるんだ。
まずは深呼吸を（スーハー、スーハ）
ＯＫ落ち着いた。声出すぞ～

「おぎゃ～おぎゃ～」

・・・・・・・・・
なんじゃと～！
何の嫌がらせだ！

俺が何をした！
１４歳に赤ちゃんをやらせるだと！
精神的にきついだろ・・・ごめんよ、母さん。

俺は３０秒間心の中で泣き叫んだ・・・

おっと、何かがそれたな。
まず俺は、転生して・・・
あっ、そっか転生したから赤ちゃんなのか！
な～る。（どうしようかと思ったよ。良かった～）

「アーサー産まれましたよ～」

一人で安心感に浸っていると、
疲れきったような、だがとても美しい女性の声が聞こえた。
誰だ？

「ああ、マリアご苦労様。
この子の名前どうする？ジルも考えるか？」

今度は、逞しい男の人の声が聞こえてきて、
そのままアーサーと呼ばれる男性が俺を抱き上げた。

「うん！かんがえる。なまえはね～、オが付くなまえがいいなぁ～」

次は、幼い感じの男の子、多分ジルって子だろう。
その子の声が聞こえてきた。

「オですか？オ、オ、オ！オルッスなんて、どうですか？アーサー」
「オルッス。いい名前だ。それにしよう、この子は今からオルッス・ワーソンだ！」
「おるっす。うん！いい、ぼくも、きにいったったよ」

三人で楽しそうに笑っている。

いいなぁ～仲が良くて楽しそう。
そんで、今の状況と話を聞くと俺が赤ちゃん(オルッス)で、
産んでくれたのはさっきの女性(マリア)みたいだな。

「オルッス、これからよろしくね」
女性(マリア)が優しく俺の頭を撫でながら言ってくれた。

俺は新たな家族に迎えられ、
新鮮な気持ちと家族の温かさを久しぶりに感じたせいか、
ものすごく眠たくなってきた。

そして、俺はそんな気持ちを抱きながら深い深い眠りについていった。

こうして、このイニュートの世界に、
神に世界の調和を任せられた一人の少年が誕生した。

誕生（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。この話では登場人物が増えます。オルッスは正和ですから、３人ですけどね。この三人の設定などはこの章の中間か終わりで設定？として投稿したいと思います。

第２章の「幼少時代」では主にこの４人＋村人＋ぼちぼち魔物で進めていこうかなと思います。増やしすぎると名前に困ってしまいますが、そこは頑張っていこうと思います！では、次話でもよろしくお願いします。

夢（前書き）

寒いですね～この頃、朝起きると「ぶるぶる」って体が震えます。
さて、新たに投稿しました。タイトルは「夢」です。
前にコメントを頂いて、説明不足かなぁ～と思ったので2話目の「神の世界」の補足として書かせてもらいました。
では、お楽しみください。

夢

ん？ここは何所だ～？
いつもみたいに真っ暗ではないけど、
どっちかって言うと明るいな。
俺、確か赤ちゃんになってたはず。

眠たくなって寝たのか。赤ちゃんだからしょうがないな。
うん。一人で納得してみた。というか体が赤ちゃんなんだけど・・・
まぁ～いいか。本当に、ここ何所だ？

「正和～ここですよ～」

その声は数時間前に聞いた、笑顔の素晴らしいあの、神様の声だった。

「ヘルシスさん。お久しぶり？」
「お久しぶりです。正和。」

そう言って彼女は、ふか～く頭を下げる。俺もつられて礼をする。

「どうしたんですか？ヘルシスさんがいるって事は、
ここは俺の夢の中ですよね。」
「はい、そうです。結構大変でした～神の世界とここを繋げるの。
軽く15年はかかりましたね」
「15年！」

ビックリした。十五年って、俺さっきこの世界来たばかりだぞ。
「大変なんですよ～空間の移動は、次はすぐ来れますけどね。」
「凄いですね！まぁ神だから何でもありか・・・」
凄いなぁ～これしか言えないよ。神、恐るべき。

「でっ、ヘルシスさん何で来たんですか？」
「えっとですね～前、力が暴走するかもしれないからと言って
詳しい力の事言わなかったじゃないですか。
あの後で気づいたんですけど、あんまり自分の力を知らないと
他の神認者（しんにんしゃ）の人達に襲われたり、
暴走した時に力の制御方法を知らないと、
私が来る前に暴走を止められないと思ったんですよ。
なので、力のある程度の情報と、この世界（イニュート）の法則を説明しに来ました。」

要するに、俺が何も力を使えない小さい時や、
力を使った時に暴走した時のために、
その力の制御方法を知らないと暴走を止められないからと、
前に俺が力を酷使し過ぎるとイニュートが、
それを拒絶して周りの自然環境が悪くなるとか言っていたから
どのようにやったら世界が拒絶しないですむかで
法則を説明するんだな

「わかりました。お願いします。」
「はい。まず、正和さんの力から言いますね・・・」

～ヘルシスさんが説明を始めてから約１時間～

長かったぜ！一通り聞いてやっとわかった。
えっと～つまり、俺の力は神認者（しんにんしゃ）の神の１０００分の１の力と、
今は封印されている世界の調和者（せかいのちょうわしゃ）の神の１０分の１力の二つある。

神認者（しんにんしゃ）の力は神器（しんき）俺の場合は白の武器（ホワイトウェポン）と、
神級魔術が使えることと、致命傷だと思われる傷も一瞬で直したり、
契約した神の得意属性の魔法がとても強くなるらしい。
ヘルシスさんは全属性得意らしい。

（魔法には初級、下級、中級、上級、最上級があり、
普通の人では最上級が使える魔法の限界で、
詠唱が必要になり、
神級は文字通り神のレベルの魔法で魔術と言って神認者しか使えず、
詠唱が要らないようだ）

だが、いくら他の神認者達とは基本的な力では勝っていても、
技能や経験の差で戦ったら即死するらしい・・・
だから、強くなるまでは戦うなと言われた。
どうやら他の神認者達は、あまり積極的にに行動していないらしい。
大きな行動を起こす時は神が命令を出して、
神の利益になるように動くようだ。

調和者の力は6歳（平均的に自分で魔力を操れる歳）になったら封印が甘くなり、
過程さえふめば、俺でも封印を一時解放出来るようだ。
開放すると魔力がほぼ、上限無しで使えるようになる事だ。
でも、力が暴走したりする事もあり。
それを止めるには、自分で「一時封印魔術（いちじふういんまじゅつ）」を使わないと駄目らしい。
後で覚えさせられるようだ・・・
後の力は飢えた土地、人工的に破壊された自然の回復や、
神認者（しんにんしゃ）の精神世界から神の世界へ干渉する力だ。
（神認者が行動した時にその行動が世界にとって、
何らかの悪影響が及ぶのなら、その神認者を倒し
その人の精神世界から直接神の世界に干渉して
神を倒すのが調和者の仕事だからだ。）
その後にヘルシスさんが神に罰を与えて反省させるようだ。
それ以外は、魔物を倒したときに出る魂（憎悪）を清め
清浄な魂にする事だ。

つまり、調和者の力は世界の乱れを調和するためのようなものがほとんどだ。

白い武器（ホワイト・ウェポン）は前に言われた通り、
俺が思えば、色は絶対に白だがどんな武器を造れる。
後は消えろと念じなければ、武器は壊れるまで消えないらしい。

イニュートでは、色々な種族が共存しており、
（人族、魔族、人獣族、獣族、エルフ族、妖精族、聖獣族、天使族、悪魔族）など
沢山いるようだ。陸は大きな大陸が二つあって、
他にもさまざまな島が多くあると言う。
エルフ、妖精、聖獣以外は村や町に住んでおり、
この三つの種族はそれぞれ特定の場所にいるようだ。
言葉はヘルシスさんが俺に「通訳魔法（つうやくまほう）」を
かけているから余計な事は考えなくていいとの事だ。

問題なのは急激に魔物の数が爆発的に増えていて、
民間の種族達が襲われたりする被害が多発しているようだ。
なので、まず神認者を倒すより先に、
魔物の数を減らせてくれると嬉しいのことだ。
だが、倒した際に出る魂（憎悪）が人の中に入ると、
その人は、魔物の魂（憎悪）に取り付かれ自らも魔物になり、
人を襲うようだ。

さらに、この世界にあまり強い負担をかけるとマナ（空気中の魔力）が暴れて、
自然環境を壊すようだ。
なので、この世界の人達は
まず、結界魔法を覚えてから攻撃、回復、補助などの魔法を覚える
ようだ。

これが、ヘルシスさんが一時間ぐらいかけて説明してくれた内容を
俺なりに、噛み砕いて改めて自分で自分自身に説明したことだ。

「相変わらず長いですね～」
俺はもうふらふらだ。
すると、苦笑いしてから
「長くて、すいません。このくらいです。
後は正和に「一時封印術(いちじふういんじゅつ)」を
習得してもらうだけですね。
これは、神級なので詠唱は必要ありません。
やり方は自分の胸に魔力を貯めてそれを凝縮する感じです。

ヘルシスさんがやって見せてくれた。
すると、ヘルシスさんの体中の魔力が胸に集まっていって、
「す～」っと息を吸ってから
「一時封印術！」
と言った。
すると、白い力がその魔力を上から飲み込んだ。

パチパチ～、拍手！凄いね～
「さぁ、正和もやってみましょう♪」
「ＯＫです」
俺は集中すると赤ちゃんの小さな体の魔力が胸に集まってくる。
そして・・・「一時封印魔術！」
と叫ぶと、俺もヘルシスさんと同じように
白い力が集っていき魔力を飲み込んだ。

体に感じていた魔力が無くなった感じがする・・・

「このくらいですかね。言う事は言いました。「一時封印術」は、一時間ぐらいしか効かないので、使ったのを感知したら私が「封印魔術」を掛けに行きますので」

「わかりました。ありがとうございます」

「あっ！時間の事言うの忘れてました。イニュートの時間は前の世界（地球）と同じです。

正和さんが産まれたのが夜だったので、産まれた後日の朝ですねイニュートの事をよろしくお願いします」

「はい、頑張ってきます」

「はい♪頑張ってください」

彼女がそう言ういい、ニッコリと笑うと

「空間移動魔術（くうかんいどうまじゅつ）」と言うと、

俺の夢から消えて行った・・・

しばらくすると、何所からかやさしい声が聞こえてきた。

それは昨日聞いた。俺を産んでくれた新しい母の声だ。

目を覚ますとここに来（イニュート）てからの始めての一日が始まった。

夢（後書き）

どうでしたか？2話ではわからなかった事がわかってもらえていたら嬉しいです。
前書きでも書いた。コメントを頂いた事なんですけど・・・とても参考になりました。ありがとうございました。
私は始めて小説と言うものを書くので色々と気づかないで投稿してしまって、後で「あ、」ってなる事が多いのでコメントで指摘くださって、とてもありがたく思います。
他の人々も気になる事や指摘などあればコメントをよろしくお願いします。
最後まで読んでくださってありがとうございました。

5年後　～前編～（前書き）

６話目の投稿です！いやぁ～本当に寒い。風ひいちゃいました。
さて、私の私情はここまでにしてこの話の説明です！
タイトル通り５年後です。速いですね。のろのろ書いていくよりも、速く正和（オルツス）の活躍を書いた方がいいかな～と思ったので一気に５年も進めちゃいました！と言う事で結構、幼少期の展開は素早く書こうかなと思います。
この話は、なんと！ヒロインが登場します！どんな子かは、この話を見て下しい！では、お楽しみください！

5年後　～前編～

「ふぁ～」

ぼくは大きな欠伸して起きた。
現在7時３０分、日付けは１２月２５日の５０５年です。
あ、今日僕の誕生日だ。
プレゼント～♪

ベットから飛び起きて周りを見る。

「あった～！」

見つけた！ベットの下に5角形の小さなケースがあった。
それを開けようとしてケースを持ってみる。
すると、箱の側面に一枚の紙が挟まっていた。
？なんか書いてある。母上の字だ。
読んでみよう・・・

オルッス誕生日おめでとう。

今日はあなたの5回目の誕生日ですね。おめでとうございます。
早速ですがこの紙を見ているって事は五角形の箱を持っていますね。
その中に入っているのはネックレスです。なぜ行き成りこのプレゼ

ントを渡したかと言うと、
ワーソン家のでの決まりで男の子の場合5歳の誕生日の時に、
それをその子が起きた時に渡すというのが決まりになっています。
お母さん達は今日のあなたの誕生日パーティーの準備で王都へ買い出しに行っています。
なので、私達はお昼まで帰ってこれません。
少し寂しいかと思いますが我慢してください。
下の部屋にはウールがいるのでウールと遊んでいてくださいね。
朝食は空間庫に入っているのでそれを食べてください。
ご飯を食べている時にさっきのネックレスをかけてみてください。
それでは、今日の誕生日パーティー楽しみにしてくださいね。

なるほど、母上たちは買い物に行ったのか。
そういえば、さっきは浮かれていて考えて無かったがもう3年か～
この世界に来たのは・・・
そうだな～何にもやる事無いし、腹も減ってないし今までの事を振り返ってみるか・・・

ぼくの名前は神宮正和で地球という世界に住んでいた。
でも、１４歳の時にぼくは人を助けて死んでしまった。
だけど、目を覚ますとそこにはヘルシスって言う神様がいて、
ぼくにその人は神認者と世界の調和者の力をくれて、
僕はヘルシスさんの神認者と、この世界の調和者っていう形でイニュートに転生してきた。
僕が産まれたのは、ワーソン家だ。

父上のアーサーがぼく達の住む大陸マーズの南の森にあるイチイ村と言うところの領主をしている。
ワーソン家は中流貴族でそこそこの権力をもっていて
結構大きい屋敷に住んでいる。
家族構成は父がアサー、母はマリア、兄はジル、そしてぼくオルッスだ。
さらにペットを飼っていて名前はウールだ。
５年間であった事は色々あるから気か向いたら思い出してみよう。

父上はさっきも説明が貴族だ。背は１８０前後くらいで金色の髪と、
同色の目をしている。この世界では目や髪の色が様々ある。
顔はイケメン過ぎるくらいで２６歳だ。

母上は元平民だが魔法学校に通っていて、
学年では主席を取るほど優秀な魔法戦闘師だ。
父上とは学校の在籍中に知り合って、父上の一目ぼれだ。
その後に色々とあったみたいだが、うまくいって今ではラブラブだ。
色々とあった事は今度話そう。
背丈は１６５前後、金色の髪と赤い色の目が特徴で、
ヘルシスさん並の美貌。２６歳。

兄上のジルは父と同じ目と髪を持っていて、
ぼくの事を大切にしてくれるとっても優しい兄だ。
兄上はワーソン家を引き継ぐ事が決まっていて後3年したら、
父上と母上の行っていた学校に入ることになっている。
背丈は１４０前後だ。

幼いながらも村の女の子に２０回も告白されている。
イケメンだ・・・そこは気に入らない・・・今９歳だ。

　ぼくは、さっきも行ったが転生者でこの世界の調和者であり、
ヘルシスさんの神認者だ。
金色の髪と左に金色の目、右に赤色の目のオッドアイだ。
この事は、家族にしか知られて無い。
父上がぼくが産まれて、その事に気づき左目に「変色魔法（へんしょくまほう）」を
掛けたため知られずにすんだ。
オッドアイはこの世界での「神災（しんさい）」を
意味していてあまり良く思われていない。
なぜ、一人称が俺からぼくになったかと言うと、
前に俺って言ったら・・・母上が泣きながら

「オ、オルッスが～ふ、ふ、不良になちゃった～」

と言いながらぼくをぶらぶら揺らすから・・・
それがトラウマになってしまい、今ではぼくになっている・・・
いずれは俺に直すつもりだ。
ぼくの背は１００前後だ。
ぼくの神器（しんき）の白（ホワイト）の武器（ウェポン）は、
まだ使っていない、産まれた日以来ヘルシスさんは夢の中に現れて
いなくて、
何も出来ない状態だ。もうちょっとしたら、
兄上が今、父上と鍛錬をしているから、
僕も鍛錬を請けれるように頼もうと思う。
頑張ろう！

ウールはワーソン家で飼っている。獣族の狼型だ。
獣族は地球でいう動物みたいなものだが、高い知能を保有していてもっとも高いものでは人型になれるほどである。
人獣族は人族とこの獣族（人型になれる）の子供である。
獣族はよく、使い魔として呼ばれる。元は父上の使い魔だったらしいが、
今はペットになっている。何でかは次の機会で話そう。
体長は９０前後で耳がもふもふしていて可愛いし温かい。
凄く気に入っている。

「ふぁ～」

また、欠伸が出たよ。このくらいかな？
お腹空いたな～ご飯食べよう。
その時にプレゼントのネックレスを見てみよう。
ぼくは服を着替えてウールの居る１階の居間に下りて行った。

「がうがう～」

居間に下りるとウールが吠えながら、こっちに寄って来た。

「おはよう、ウール。僕たち昼過ぎまで二人だよ」

そう、問いかけると・・・

「がう！」

と、返事をしてくれた。本当に頭が良いんだな。
ぼくは関心しているとウールが、
ぼくの分と自分の分の朝食を持ってきてくれた。

「ありがとう、ウール」
「がう～」

撫でてやると、ウールは気持ちよさそうに目を細めて、
吠えてくれた。
今日の朝食はパンとハウイ兎のソテーと水だ。
（ハウイ兎は魔物である。魔物は倒した後に浄化すれば食べれる。
結構おいしい♪）

「いただきます」

ふ～食べ終わった。美味しかった。

「ご馳走様でした」
「がう！」

よし、ネックレスをかけてみよう。
ぼくは五角形の箱からネックレスを取り出し、首にかけてみた・・・

「どう？オルッス？」

ん！？お、お、女の子の声が聞こえる。
ぼくは声のしている方を向くと、そこには・・・

「・・・え？」

そこには、可愛らしく首を傾げている狼型の獣族のウールがいた！

「おっ！その表情は聞こえているね。やった～！
やっと会えたよ～マスタ～」

そう言うと、意味がわからなく混乱しているぼくにウールが抱き付いてきた。

「マスタ～これからよろしくだね～。マスタ～」

今度はぼくの顔をぺろぺろ舐めてきた。

「ちょ、ちょ、ちょっと待って、ウールなの？」

そう効くと・・・

「そうだよ～。マスタ～私だよ！わ・た・し！ウールだよ～！」

マジですか～！これ原因だよね・・・
そう思って俺はネックレスを外すと・・・

「マスタ～取っても変わらないよ～」

「・・・」

何じゃこりゃ～！！！！！！！！！！！！
心の中で叫んだ！この思いは誰が受け止めてくれるのだろう？
よし！まず、落ち着こう。

「ふ～、ふ～」

よし！落ち着いた！

「ＯＫ～ＯＫ～。君はウールだね」

「そうだよ！私ウールだよ」

テンション高いね～

「なんで、喋れるの？」

「えっとね～マスターがそのネックレスかけたから」

うん～答えになってないな～

「でも、今外してるよ」

「うんとね～さっきネックレス付けてたときに契約したから・・・

婚姻の・・・ぽっ／／／／」

「なんじゃと～！！！」

ぼくは子供らしからぬ声を張り上げた。

こ、こ、婚約だと～！？

しかも、「ぽっ／／／／」ってなんだぁ～！

つーか、どうやったら婚姻が今の状況と繋がるんだ！

「はぁ～はぁ～はぁ～」

「お、落ち着いて。じょ、冗談だよ～

マスターとはいずれはなるけど・・・ぽっ／／／／」

だから、「ぽっ／／／／」ってなんなんだぁ～！

ん？話がそれてるな。

「もう！マスター！話それちゃったじゃないですか！」

ぼくの頭から・・・ピシッ（キレタ音）

「お前のせいじゃろぉっ！」

この後ウールとオ・ハ・ナ・シをしました。

5年後　～前編～（後書き）

どうでしたか？ヒロイン。結構ボケさせました。正和（オルッス）には突っ込みを担当してもらいます。今はヒロインって感じはしませんが色々と頑張らせます。次の話はこれの続きです。後編ですね！今度は少しウールの過去を混ぜてみようかと・・・ネックレスも次で説明します。

感想、又は一言お待ちしております。

最後まで読んで下さってありがとうございました。

5年後　～後編～（前書き）

こんにちは！いつも見て下さってありがとうございます。
7話目です。前回の5年後　～前編～の続きの後編です。ではどうぞ！

5年後　～後編～

皆さん、こんにちはオルッス・ワーソンです。
あ、本当は神宮正和ね。
やぁ～死んだあの日から驚く事多いや～
なんと！飼ってるペットが喋っちゃったよ。
まぁ、色々話したから聞いて下さい。

あ～久しぶりにキレタな。
うん。でウールに（喋ったペット）
お話というなの、イライラ発散をした。
大丈夫だ！暴力は使っていない・・・こちょこちょして気絶さしたけど・・・

しばらくしたら気絶していたウールが目を覚ました。

「マスター酷いよ。傷ものになちゃったよ～
お嫁に行けない～」
「お前が悪い。ふざけ過ぎだ！」

ぼくは、いかにも怒っていますよ雰囲気で言っているのに・・・

「マスターのせいだよ。マスターがもらってね。キャフ♪」

そう言うとウールは顔を赤め。モジモジし始めた。
こ、こいつは強敵だ。一切ぼくの言う事に耳をかさない。

・・・しょうがない。

「そこは、後にしてまず、ウールの正体が何なのか言ってよ。
話が進まない」
「も～う、しょうがないな。マスターは、
いいよ、私の正体からだね。まず人型になろうか」

ん？人型だって・・・！
え！？人型ってかなり知力の高い獣族じゃないと出来ないはず。
もともと、ウールは狼型の獣族だから。
たしか、狼型は獣族の中でもかなり頭のいい方だけど・・・
なれるのは、フェンリル種だけだったはず。
でも、フェンリル種はかなり大きかった。
ウールみたいに小さくない。

そんな事を考えているうちに、ウールは白い煙に包まれていく・・・
・
やがて、ウールは煙に包まれ、ぼくは視認出来なくなった。

「どうかな。マスター！うふふふ～」

煙がだんだん晴れてきた。
と言うか、ウールが言葉から興奮と言うなの感情がみえるんだが、
なんで、コイツ興奮してるんだよ・・・
は、確かこういう感じになったら出てくるのは大抵・・・

裸の女の子！
まずい！
大変な事に気づきその場から立ち去ろうとすると、

「ガシッ」
誰かがぼくの肩を掴んでいる・・・
これはホラーですか！？
マジ恐い、マジ恐い、マジ恐い。
恐る恐る、後ろを振り向くと・・・なんと！そこには

「桃色の桃源郷が！」
「アホか！心読んでるんじゃねっ！」

ウールを叩いた。
確かにそこには桃色の桃源郷が見えたけど・・・

「痛いよ～マスタ～酷いよ、正体を見せただけなのに・・・」

やぁ～確かに今のは心読まれただけだから、
ウールはそんなに悪くないんだが、マジ恐いんだぞ～

「ごめん。やり過ぎた」
「ニヤリ、じゃあ～マスター私の胸に溺れて！」
「なぜ、そうなる！」

今度は殴りました。
ウールは部屋の片隅で丸まってます。
衝撃的過ぎた。
だって今のウールの姿は官能的過ぎる・・・
歳は１５～１６位で背は１７０前後、
髪はウールの狼型の時と同じ毛の銀色、
目は赤い。
スタイルは出るとこは出てて、絞まっているとこは絞まっている。
ナイス！って言いたくなるだろう。

だが！今のぼくは５歳児だ。
精神年齢は１９だから結構やばかったが、
この体に影響されて興奮はしない。
始めてこの体で良かったと思う。
あのままだったら、ぼくの理性の鎖が千切れ・・・
考えただけで恐ろしい。

「もういいから、服着て」
「わかったよ、マスター。でも服どこ？」

あれ？確かに考えてみたら服無いな。
母上の部屋に行くのはさすがに不味いし、
ぼくの服だと今よりもエロくなる・・・
困った・・・

「やっぱり、このままで！」
「だめだ！」

なぜ、そこで顔を明るくする。

「そうだ！」

思いついたぞ！この力を使ってみよう。
服も戦闘向きにしたら武器になるはず！
ぼくは、早速手に力を込める。
イメージするのは・・・
（戦闘向きの絶対に切れない布製の服）
イメージすると、ぼくの手には白い粒子が集まってきて
段々、形が構成されてきた。
「ピッカッ！」

と強い光がぼくの手のひらから出てきた。
光が無くなると、ぼくの手には白いシャツと同色のズボンがあった。

「とりあえず、これ着てウール」
「うん」

ここまでが長かった。疲れたぜ。
でも、初めてだったけど使えたな。白の武器（ホワイトウェポン）
これは今、消したら大変な事になるから
ウールが狼型になったら戻そう。
じゃあ、話を聞くか。

「さぁ、話してもらうよウール」

すると、ウールはさっきまで、
ふざけていた奴は思えないほど、真剣な顔になって言った。

「わかったよ、マスター。
まず、私の正体だね。私はマスターも勘付いている通り、
フェンリル種だよ。それもかなり上位にいる」
「？なんで、ウールはこんな家のペットになっているんだ？」

そうだ、フェンリル種は魔物とは違うが基本的には、
森などで集団で暮らしている。
しかも誇りが高く、使い魔として召喚されても
契約を拒み、始めは戦闘を行い勝利し、主を認めないと
そのまま、逃げられてしまうのだ。
たとえ、契約をしても主以外の言う事は聞かない。

だから、フェンリル種はこの様な家でペットになっているのは有り得ないのだ。
でも、ウールは家族みんなの言う事を聞いている。
なぜだ？

「ペットじゃなくて家族（ファミリー）と言って欲しいな～」

そう言ってニッコリと微笑む。
若干ふざけてる感があるけどそのままにしよう。
話が進まない。

「わかった。じゃあどうして家族に？」
「うん♪マスターはアーサーが
私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚したのを知ってるよね」

父上のこと思いっきり呼び捨てだよ・・・
まぁ、いいか。
ん？気になることがあったな。
確か「私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚した・・・」

「おかしくないか？だって、父上が召喚したのは確かに狼型の獣族だったけど、
それってウールの事じゃないのか？」

すると、首を振って

「違うよ。アーサーが召喚したのは私のお母さん」
「そうなのか。で、なんでこの話と繋がる？」
「繋がり？繋がりは、簡単だよ。
私のお母さんがアーサーの事を気にいちゃって

そのまま・・・その間に」
「え？それって母上のこと？」

まずくない？したらぼくって人獣族に分類されるよね。

「違うよ～そのまえにフェンリル族は精が無くても子は産まれるから」

良かった。でも精を必要としないって、
生き物で有り得るのか？

「OK。まずはそこを置いておこう。
また話がそれたな、
ウールのお母さんが父上とどうなったの？」
「私のお母さんがアーサーの使い魔って事までは言ったね。
それで、アーサーの事を気に入ったお母さんは、子を作ろうとしたんだけど、
そのときにアーサーがマリアのこと好きで、
断ったから自分で子を宿し産んだって訳で、それが私」

父上やるな～母上を選んで振ったんだ。男前だな。

「でも、それじゃあウールのお母さんは何所に行ったの？」
「私のお母さんは、死んじゃったんだ・・・」
「ごめん。それはわかったけど
それがどうしてウールがここにいるのに関係してるんだ？」
「それはね。お母さんが死ぬ間際アーサーに
「私の子を貴方の子のお嫁にいかせるね」って契約したんだよ。
無許可で」
「何で無許可！？勝手に契約は不味いだろう」

「いいんだよ。それでアーサーは私の事を自分(お母さん)の使い魔の
子だからってことでこの家にいるんだよ」
なるほど、そんな事があったのか。
でも、あのネックレスは何なんだ？

「あのネックレスは？」
「あのネックレスは、お母さんが「錯覚魔法」をかけて、
5歳になるとあげるって事をワーソン家の決まりにして、
ネックレス自体は私との契約」
「マジですか。
でも、兄上は反応しなかったんだろう？」
「そうだよ。ジルでも良かったんだけど、
こうやって喋れなかったから私が拒否したの。
マスターはただの子供じゃないし」

え！？驚いた。コイツは気づいてる！
試してみるか？

「何言ってるんだよ。ウールぼくはただの子供だよ」

出来るだけ平然と答えてみるが・・・

「嘘は良くないよマスター。
お母さんが私の為にある程度知識を残してくれたから
わかるけど、マスターの魔力は2つの異様な力で出来ているのが
わかるもん」

さすが、フェンリル種だな。知力は人よりあるな。
どうする？ここで言うか？

どうやら、どこへ行ってもウールは付いて来るし、
フェンリル族はかなり強い。
本当の事を話して完全に味方に付けるか？
さっき、知識ももらったって言っていたから
相談できる事は多いかもな。
ここは乗るべきだ！

「・・・そうだよ。ウール、ぼくはただの子じゃない」

「やっぱりね。どうせ神認者（しんにんしゃ）かなんかでしょ」

そこまで気づいているのか。さすがだな。

「うん。ウールの予想通り。ぼくは神認者だ」

そう告げると、ニコニコして笑いかけてくる。

「ＯＫだよ。マスターこれからよろしくね」

「ああ、よろしく」

「で、ウール小さくなれる？」

「ん？出来るけど、どうして？」

ぼく達は話をこんな感じで続けていた。

「色々と目のやり場に困るから・・・」

そうなのだ。今のウールは目のやり場に困る・・・
だって、見た目１５，１６のウールが、

ぼくの簡易で作った白の服を上下に一枚着てるだけ。
後はご想像にお任せします。

「わかったよ。マスターどのくらいがいい？」
「じゃあ、ぼくと同い年くらいで・・・」
「え、もしかしてマスターはロリ
「ちょとまったロリコンではない」
良かったよ。ウールは心配したのだ♪」

本当にぼくはロリコンではない。
そんな事を考えていると、ウールはいつの間にか
ぼく位の背丈になっていて顔も少し幼くなっていた。
あ、やばい服作らなきゃ。
そう思って、ぼくは服創造に取りかかった。
これから付いて来てもらうから、簡易じゃない方が良いか。
一応女の子だし、ズボンタイプよりもドレスっぽい方が良いし、
肌着は無理だな。色々と無理だ。勘弁してもらおう。
（さっきより小さくて、機能性は絶対に切れない耐久性、
短縮自在でこれからウールが大きくなっても着れて、人型になった時のみ現れる。
デザインは下は膝までの丈のドレスみたいの・・・）
そう思って作ると膝位までの丈の白のドレスが出来た。

「ウール。これ着て」

そう言ってドレスを渡す。
ウールは嬉しそうに着てくれた。

しばらくすると・・・

「「「ただいま～」」」

皆が帰ってきたようだ。

今日はぼくの誕生日パーティーだ。さぁ、楽しもう！

5年後　～後編～（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。今回の話はどうでしたか？書いてて自分も、ん？って思ってしまいました・・・意味の分からないところや誤字、脱字がありましたら一言でお願いします。他にも感想お待ちしてます。

次話はワーソン家の皆にウールの事を説明し、オルッス（正和）の誕生日パティー会の話だと思います。では、ありがとうございました。

誕生日パーティー（前書き）

みなさん、こんにちは！いつも見てくださってありがとうございます。
今回は、主人公オルッスの誕生日パーティー回です。
でも最後には・・・・・・ってな感じです。今回のウールは少し大人かもしれません！では、お楽しみください。

誕生日パーティー

　母上達が帰って来た。
ウールの事を見て、皆驚いていた。
その後にゆっくりと紅茶を飲みながら例(ウール)の子の話をした。
なぜか父上は話を聞きながら顔を青くしてぶるぶる震えていた。
母上はニッコリと笑いながら、
こめかみに怒りマークを浮かべていた・・・恐い・・・
兄上は何か、今日の王都への買出しで心身ともに疲れている様子で、
話を右から左に受け流していた。

　話の途中ウールがぼくの正体を言いそうになったが、
ぼくが白針を創造してウールに投げつけて口止めした。
こんな事があったが、皆わかってくれて
ついでにぼくが旅の出来る歳になったら一人旅をしてみたいと言うと。
あっさりと了承してくれた。
母上は若干ぼくを涙目で睨んでいたが・・・
そして、嬉しい事に旅に出るならと父上が兄上と、
一緒に鍛錬をやってくれると言ってくれた。

～ＰＭ１７：３０～
　まぁ～色々な事があったけど
今では皆ぼくの誕生日パーティーの準備をしている。
ぼくがここに来る前に思っていた貴族のお堅い感じのパーティーでは無く(イニュート)

ここでは村の人達が屋敷に集まってくれて村人皆が祝ってくれる。
前に村人の人に聞いてみたが、
こんな風に皆で集まってこういう事をするのは珍しいし、
さらには自分達(村人達)の誕生日パーティーを父上は開く事も凄いと言っていた。
そんな事もあり皆ぼく達に、とても良くしてくれる。
とってもいい村だ。

皆、せっせと働いている。
ぼくも手伝おうとしたんだが、
「坊主は働かないで遊んでくれ」
と言われる。しかも坊主・・・
まぁ～おっちゃん達はみんな、坊主って言うからしょうがないか・・・

そんな感じで今はウールと遊んでいる。
ウールは今は狼型に戻っている。
村の人達に見つかったら少しまずいから・・・

しばらく遊んでいると兄上が来た。
「オル、もう少しで始まるから来て」
兄上はぼくのことを「オル」と読んでいる。
「わかったよ。兄上」

しかも、ぼくの家はなぜか敬語を皆使わない。
さすがに、王都や他の貴族の集まりの時は使うが。

～ＰＭ１９：００～

「皆さん、私の息子オルッスの
誕生日パーティーに来てくださってありがとうございます。
今夜は息子の誕生日ですが、沢山の料理も用意しています。
ぜひ、お楽しみください！」

父上の挨拶でぼくの５度目の誕生日パーティーが始まった。

～ＰＭ２０：３０～
挨拶の後ぼくは色んな村の人達と話しかけてくれた。
「大きくなったな～坊主。誕生日おめでとう」
「オルちゃん、誕生日おめでとう」
「オルッス、おたんじょうびおめでとう」
などなどだ。上からおじさん達、おばさん達、村の子供達だ。
なんて温かいパーティーだ。涙が出そう・・・

パーティー会場から１キロぐらいの場所で感動に浸っていると、
後ろから誰かが抱き付いてきた。

「マスター私がお祝いにチューをして上げるよ」

どうやらウールらしい。
それに人型になっている。
それに、歳は１０代中間くらいだな。
なんでわかるかって？それはなぁ～
ぼくの背中に大きなメロン二つが当たっているからだ！

「ウール。色々と恥ずかしいからやめて。後、皆にばれる」

「良いじゃないか、遠いし絶対見えない。
しかもいずれマスターと披露宴を挙げるんだから」

「ベシッ！」
ウールを叩いた。コイツは本当に懲りないよなぁ～

「冗談はやめとけ」

「冗談じゃないよマスター。結構本気！」

「もういいや。疲れた。」

そう言い残し、ウールを放置して屋敷に戻っていく。
行くときに
「えっ！？マスター乗ってくれないの！」
と、聞こえたがそこはスルーでいこう。スルー。

え？お前の誕生日なのに居なくて良いのかだって？
良いんだよ。村の大人達や父上はもう、お酒のせいでベロベロだし、

母上は村の女性達に色々と話をしてる。
兄上は他の子達と遊んでいるから。
いまいち、子供の遊びが分からないんだよ・・・
いやぁ～、そりゃね。ぼくの精神年齢は１９だよ。
つぼがわからん。つぼが。
寝るか。
そう思ってパジャマに着替えようと自分の部屋に上がろうとすると・・・

「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」」」
村の方から悲鳴が聞こえてきた！
なんだ？何があった！？
ぼくはあわてて家から飛び出した。

「マスター乗ってく？」

「ウール？なんで大きくなってるの？」

そう、そこにはいつも見慣れているウールではなく。
二まわりほど大きくなった銀の狼がいた。

今ぼく達はさっき誕生日パーティーをやっていた広場に向かって走っている。
走っているのはウールでその後ろにぼくが乗っている。
ウールはいつもの愛らしさが無くなり、
前、自分の正体を明かした時よりも真剣な表情で走っている。
ウールはかなり巨大化していて、全長が３メートル位ある。
なんで大きくなったのかは分からない。

聞きたいが、今はそれどころでは無いだろう。
今のウールの時速６０キロ位だ結構速い。
広場までは後２キロほどだ。

「ウール急ぐんだ！」

「ＯＫ！マスター掴まってね～」

そう言うとウールはまたスピードを上げた。

ウールがスピードを上げるとすぐに着いた。
まず、状況が分からないから、木陰で様子を見るか。

「ウール。あの木の陰で様子を見るよ」

ぼくは５０メートルくらい離れた、
見晴らしの良さそうな木を指差しウールに言った。

「分かった！」

そう言ってウールは木陰に入った。
そして、広場の様子を見ると・・・

「何！」

ぼくは驚いた。
そこには、多くの魔物たちがいたのだから。

そこには、沢山魔物がいた。
村の男達は戦っているが、酒のせいで思った通りに体を動かせていない。
女性達は怯えていて動けそうに無し
同じく子供達も固まっている。
でも、兄上が見えたからしばらくは安心だろう。
問題は今、最前線で戦っている、父上と母上だ。
二人は確かに強い。
だが周りに村があるから、全体に効く魔法は使えないようすだ。
二人は魔法剣を出して戦っているが明らかに押されている。
（魔法剣は属性魔力を具現化した剣。）

「グワァァァァアア！」

今、村人が魔物の牙の餌食になった。
まずいなぁ～このままだと、全滅させられる。

それに魔物はそう簡単に殺せないのである。
魔物には魂（憎悪）の塊があってそれが生物の体の中に入ると、
その生物が魔物になってしまうからだ。
だから、基本的に魔物を倒すときは一体に当たり二人で戦うのだ。
一人が魔物を倒し、もう一人が魔物の魂（憎悪）の浄化をやる。
こうしないと、倒しても逆に魔物が増えてしまうのだ。

いつもなら皆が協力すれば倒せたはずだ。
だが、今は夜陰であり、さらには酔っていて協力もくそも無い。
しかも、この村にはしばらく魔物は襲ってこなかった・・・

襲ってきたのは父上がこの村に来るずっと前だって聞いた。
だから、シュミレーションと言うものが出来ていないから、
こういう状況での対応が出来ない。

どうする？ぼくには神認者（しんにんしゃ）の力がある。
けど、まだ普通の魔法ですら使えない
ぼくには神認者本来の力。神級魔法が使えない。
どうやればいいんだ？

「マスター・・・悩んでても始まらないよ・・・
マスターが本来の力をまだ使えなくても、
私の服とか造った力はあるでしょ」

「ウールの言う通りだけど。
君の服を造った力だって使いこなせない・・・」

すると、ウールはいつの間にか人型に戻っていた。
そして・・・ぼくを抱きしめて、やさしく・・・

「いいじゃないですかマスター。マスターの造った
この服は万能ですよ。私が狼に戻ったら消えてるし、
人になったらなぜか元通り、
しかも、いくらひっぱても爪で引っかいても切れない。
凄いじゃないですか」

「・・・お前、そんな事してたのか」

せっかく造ってやったのに。
でも、今のウールの言葉を聞いて自身は出てきたな。

「ありがとう。ウール」

「はい。私はこのままここにいますね」

「ああ、助かる。危なくなったら助けてくれ」

「ＯＫです」

こんな感じでラブコメ？をしていると、
いつの間にか村の女性達の所に魔物が集まりだしてきた。
どうやら押し切られたらしい。

「よしっ！」
ぼくは気合を入れると白い長剣を創造し、
魔物達の元に駆けて行った！

誕生日パーティー（後書き）

どうでしたか？今回は？書いてて結構、悩みました。魔物もっと後に出そうかな～って思っていたんですが、戦闘の描写速く書きたいなぁ～って思っていたのでこう言う展開になりました。
と言う事で次話はオルッス（正和）の初戦闘です。神級の魔法や、世界の調和者の力は出ないと思いますが、白の武器（ホワイトウェポン）で頑張ってもらいたいと思います。
では、最後まで読んで下さってありがとうございました。次話もよろしくお願いします。

初戦闘（前書き）

こんにちは！この日2回目の投稿です。８話書いた後にアイディアが沸いたので書いてみました。今回は戦闘です。
では、お楽しみください。

初戦闘

ぼくは、魔物に駆けて行って、
今にも食べようとしていたから白い長剣で首を切り落とした。
魔物は「グォォォォオオオオ」と変な断末魔を上げ死んでいった。

「オルちゃん！」

村の女性達がぼくに気づき声を出した。
だが、ぼくはそれを無視する。
そして見たのだ魔物の背から黒い塊が出てきたのを
（あれか・・・あれが魔物の魂（憎悪）か・・・
見るからに悪の塊って感じだな・・・さて、どうやって消すか。
確か通常では浄化魔法を掛けるんだったよな？
でも、ぼくはそれを使えない・・・だが、消す方法はあるはずだ！
！そうだ！浄化をイメージした武器を造れば）

ぼくはそう思い、浄化をイメージした。
（浄化だ、浄化。きれいにするイメージだ。
そして、出来るだけ離れた方がいいな。
なら、銃タイプだ。使った事は無いが使えるはずだ。
さっきだって、剣を使った事が無いのに使い方が頭に浮かんできたのだ！）
浄化効果があり・・・連射が出来き、さらに、距離が開いていても当たる銃！
そうイメージすると、
ぼくが知っているような形の白い銃が左手にあった。
それを見てすぐに黒い塊に打ち込んだ！

すると、黒い塊は見事に当たり白くなって消えていった・・・
よし！いける。

ぼくは、魔物に近づいては斬るを続けて行った。
どうやらこの体は前よりもスペックが高いようだ。
体が風のように動く。
次々に魔物が倒されていき、その背中からは黒い塊が出てくる。
ぼくはそれを狙って白い銃の引き金を引く。

やっと、最後の魔物になった。
そいつ(魔物)を倒そうと首に切りかかるが・・・

「ガッキィィィン！」

「っ！」

なんと、その魔物は刃を弾いたのだ！
その衝撃で刃は折れてしまい、
さっきまで使っていた白い長剣は白い粒子に戻り消えてしまった。
次の瞬間、魔物が反撃してきた。
危うく、爪の餌食になるところだった・・・

ぼくは距離をとるように、銃弾を撃ち続け魔物から一旦離れる。
離れながら見ると、いままで倒した魔物は熊みたいな魔物だ。
確かに、今の魔物も熊みたいだが少し違った・・・
その魔物には全身が光輝いている。

それは鋼鉄で出来ているようにも見える。

そんな事が分かって弱点を探そうと撃ちながら
離れてみるが、甘かった。
魔物は銃弾をくらっても特にダメージが無いみたいで、
撃ち続けているのを無視しそのまま突っ込んできた！
まずい！浄化と距離しかイメージしていなかったせいで威力が欠けている。

そして、ぼくは魔物に殴られた。
「ボッン！」
と鈍い音を出してぼくの体は１０メートルほど飛ばされ
木にぶつかった。

「がはっ」

吐血した。
まずい！このままだと。
こうしてる間にも魔物は足に力を込めてぼくを殺そうとして来る。
魔物が動き出した。
銃もぶっ飛ばされたときにどこかにいってしまった。
さっきみたいに銃で牽制も出来ない。

魔物が突進してきた。
ぼくはとっさにそれを横にかわした。

魔物はそのまま突っ込み木々を折りながら進んで行った。
だが、安心がしてはいけない。
すぐに戻ってくるな。
一つ良かった事は周りに村の人達は見えないことだ。
魔物とやりやっている間に遠い所に来たのだろう。
これで気にしないで戦闘が出来る。
急いで武器を造ろう！

ぼくはイメージする・・・
（全てのものを切り裂き、
どんな反動にも耐え、
魔物の血肉を喰らいその力も飲み込む
鋭き刃、強固な刀、全てを飲み込みそれを力に変える刃！）
イメージするとぼくの手には、
沢山の光の白い粒子が集まり、
徐々にその刀身があらわになっていく・・・

でも、魔物は待ってくれなかった。
そう、魔物が折り返しこっちに向かってきたのだ！
まだ刀は出来ない・・・
多くの力、さらに強力な能力を求めたため創造に時間がかかるのだ。
魔物が迫ってくる、

「くそっ」

次の攻撃はヤバイアイツ（魔物）は
思いっきり爪を立てて切り裂こうとしている！
ヤバイな。刀を見るがまだ、刃先が造られていない。

絶体絶命だ！
さぁ～どうする！

魔法！
そうだ！魔法がある。
だが、どうする？
ぼくの知っている魔法は・・・
あっ、あった！
前に父上と兄上が鍛錬した時に魔法を使っていた。

でも、出来るのか・・・
５歳児の俺には魔力のコントロールが出来ない・・・
でも・・・

・・・やるしかないじゃないか！
ぼくは覚悟を決め、言葉を紡ぐ。

「火よ、集まり、一つの塊になり進め！火の玉！」

そう、詠唱するとぼくの目の前には、
１メートルくらいの大きな火の玉が出来た！
ぼくは「行け！」と叫ぶ！

　すると、火の玉は進んで行った。
魔物は行き成り現れた火の玉に驚き、

急停止し、危うくかわす。
そして、また進もうとして来る。
だが、もう遅い。
ぼくの右手には刃渡りが９０センチぐらいある、
美しい刀身の白刀が握られている！

ぼくは走る。さっきよりも速く！
向こうも突進してきているので、
すぐにたどり着く。
向こうから攻撃して来た。
爪を立てて切り裂く攻撃だ！

「ギィィイイン！」

ぼくは刀を盾のようにして爪を受け止める。
凄いびくともしない。
ぼくは刀を押し出すようにして爪を弾く。

「次は、こっちの番だ！」

そう言い、熊の魔物に切りかかる。
魔物はかわそうとするが、
かわしきれない。
そして、魔物の右腕を斬った。
「シュパ」と切れる。

魔物は距離をとろうとする・・・が、

ぼくはすぐに追いつき連続で切りかかる。
左手首、右肩、左肩と切れば切れほど、
この白刀は切れ味が増していく。

もう、魔物はほとんど動かない、いや、動けないのだ。
魔物はもう、足も切れているからだ。
ぼくは、止めをさそうと、
魔物の首に狙いをさざめて切りかかろうとするが・・・

「がはっ」

再び吐血した。なぜだ？
くそ、気にしてる場合じゃねぇぇぇえええ！

オルッス（正和）はまた、足に力を込めて駆ける。
その足はもう、ふらふらで、今にも倒れそうだ。
だが、けして少年（オルッス）は倒れない。
刀を不気味に光らせ魔物の命を絶つ。

「グワァァァァアアアアアアア」

魔物は断末魔を上げて死んだ・・・
そして、その背中からは黒い塊が出てくる。
それを今、創造した白い銃で撃つ。

「パァーン」
銃が乾いた音を出す。

魔物の魂(憎悪)は消えていった・・・

ぼくは今、魔物を殺した山道で寝転んでいる。
なんで？って、動けんのだよ。
それに、さっきから違和感がある。
こう・・・なんていうか・・・
体の中心から何かが沸き出てくる感じ？
まぁ、普通に気持ちが悪いと言う事だな。

でも、どうしよう？
このまま動けないのは危ないな・・・
本当にどうしよう・・・

「マスター。終わった？」
あのバカ(ウール)の声が聞こえた。
アイツのんき過ぎだろ。
マスターって呼んでるんだから少しは助けたりしようぜ・・・

「マスター、お眠かな～？」
目を開けるとそこにはウールがいた。
「おい、なんで助けなかった？」
そう、問いかけると・・・

「マスター、一人でも倒せるじゃないか～」

「そう言う問題じゃねーよ」

「そう言う問題だっぞ♪
よく、頑張ったね～偉い偉い」

コイツはバカにしているのだろうか？
しかも、ぼくの頭に手を置いてなでなでしてくる。

「ウール殴られたいのか？」

ぼくがドスをきかせて話すと。

「今のマスターでは無理だよ♪」

と、明るく返してくる。

「それよりマスター？」

「なんだ？」

「体、魔力で暴走し始めてるけど、大丈夫かな？」

ん？今なんて言った？
「カラダ、マリョクデボウソウシハジメテルケド、
ダイジョウブカナ？」
なぜか言葉がカタカタに聞こえる。
そう思った瞬間・・・

「ブシャァァァ」

ぼくの耳から大量の血が出てきた。

「ガァァァァァァアアアアア」

ぼくは激痛で叫ぶ！

だが、ウールはニコニコ笑っている。

なぜ笑っているんだ？

まさか、コイツがやったのか？

「ほらね、マスター。

暴走してるでしょ、今から封印魔法を掛けて上げるよ。

今、暴走している魔力は神の魔力じゃないから、

最上級の魔法なら暴走を止められそうだよ」

そう言うと、ウールは凄く幸せそうな顔した。

その間にもぼくの体中から血が溢れだしてくる。

なんでウールは見分けが付くんだ？

しかも、最上級？誰が掛けるんだ？

だんだん、意識がなくなってきた。

すると、ウールの声が聞こえた・・・

「ヒカリヨ、ソノセイナルチカラヲモッテ、

コノモノノ、イジョウナマリョクヲフウインシロ！フウインマホウ！」

そう言って、ウールはその美しい顔を近づけてきた。

そして、そのまま・・・
ウールとぼくの唇が重なった・・・
ぼくは、びっくりしたが
それを表せるほどの余裕も体力もない。

　すると、ぼくの体は光った。
上から、ものすごい重圧がかかり
失神しそうになったが、
その圧がなくなると、今まで苦しめていた痛みがなくなった。
「このまま、襲っちゃおうかな♪」
スッゴイ。殴りたくなったが、動けない。

　緊張がとけたらなんだか、眠たくなってきた。
ぼくは睡魔に負け、そのまま死んだように眠っていった・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～ウール視点～

今、私は愛しのマスターの寝顔を見ながら
微笑んでいるだろう。

なんで？って。
それはね～やっと会えたんだよ。
私の求める最高のマスターが、
それに、今日は封印術で彼にキスを出来た／／／
とっても、嬉しい。
本当は体の一部を触っていればいいのだが、丁度良いチャンスだ。

そう思いながら背中に乗っている彼の方を見て言った。

「マスター。凄い心配したんだよ。ゆっくり眠ってね」

この、言葉は彼には聞こえないだろう。
だが、ウールはとっても幸せそうな顔をしている。

そして、村人達がいるだろう広場に向かって歩いて行った・・・

初戦闘（後書き）

話しの中にあった。～～～～～～～が続いているのは小説の人物目線を主人公から他の人に変えるのに使います。よろしくお願いします。

今回は戦闘でしたがどうでしたか？自分は書いていて戦闘描写って普通より凄く難しいなぁ～って思いました。本当に難しかった。途中、魔法使ってしまいました・・・あれしか浮かばなかったですよ。自分は本当に未熟なのでアドバイスなどよろしくお願いします。

では、最後まで読んで下さってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6499y/

世界の調和者

2011年11月27日18時54分発行